「主の喜び給う人」　　２０２５年１２月２１日　クリスマス礼拝
ルカによる福音書　第２章１～２０節

その日は、星のきれいな夜でした。野宿をしていた羊飼いたちは、オオカミのような野獣から羊を守るために順番に見張りに付きました。ほかの人たちは自分の番に備えて眠りにつくのですが、こんなにきれいな夜は何だか寝てしまうのがもったいないくらいでした。

「おおい、起きているか」。

「起きているとも。今は俺の見張り番だからな。それより、お前は何で寝ないんだ」。

「ああ、あんまり星がきれいなんで、何だか眠るのがもったいなくってなあ」。

羊飼いたちは、話を始めました。

「そういえば、この羊たちとも、もうすぐお別れだなあ」

「うん、長いことかわいがってあげたのになあ。俺たちの仕事はしょせん、そんなもんさ。どんなにかわいがっても、俺たちの羊じゃないんだから、いずれは持ち主のところに行って殺されてしまうのが関の山さ」。

「手塩に掛けて、ここまで育ててきたのになあ。何だかさびしい気もするなあ」。

「こんな思いをしながら、野宿したり、きつい仕事もしているのに、さっぱり儲かりもしねえ。」

「そうよ。おまけに安息日だって礼拝に行くことができやしねえし、お陰でみんなからは罪人扱いされるしよ。ろくなこと無いよ、羊飼いという仕事は」。

「でもなあ、俺はこの仕事に結構、誇りを持っているんだ。ちっとも儲からないけれども、みんなが嫌がる仕事だしなあ。それに、俺たちが羊の面倒を見なくなったら、いったい誰がこいつらの面倒を見るんだい」。

「俺だって別にこの仕事が嫌いなわけじゃないぜ。いずれはいなくなるけれども、羊たちはかわいいし、大事な仕事だと思っているさ」。

「ああ、それにしてもきれいな星空だなあ。この星はみんな、神様が創ってくださったんだから、すごいよなあ」。

「星を見ていると、いやなことも忘れられるからいいよなあ」。

羊飼いたちは、満天の星空を見上げながら、野宿をしていました。すると突然、その星たちがだんだんと明るくなってきました。いや明るくなったのは星ではなく、空全体がまばゆいばかりに輝きだしたのです。

「なんだあ、こりゃあ」。

誰かが叫んだようでしたが、身の毛もよだつような恐ろしさに襲われ、声も聞こえませんでした。いったい何が起こったのでしょうか。

「バタン」。

大きな音を立てて、羊飼いたちは倒れ、地面にひれ伏します。すると、どこからともなく声が聞こえてきました。

「恐れるな。わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる。今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。あなたがたは、布にくるまって飼い葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。これがあなたがたへのしるしである」。

羊飼いたちは、何が起こったのかわかりませんでした。すると今度はたくさんの声が聞こえてきました。「いと高きところには栄光、神にあれ、地には平和、御心に適う人にあれ」。それは何重にもこだまして響きました。まるで美しい合唱のハーモニーを聞いているようでした。

しばらくすると、羊飼いたちは我に返りました。

「おい、い、今の声、聞いたか」。

「聞いた。けど、いったい何が起こったんだろうか」。

「なんか知らんけど、喜びの知らせって言っていたぞ」。

「そうだ、救い主がお生まれになったって」。

「救い主って、あの聖書に書いてある救い主のことか？」

「きっとそうだ。俺たちのご先祖様がずーっとずーっと昔から待っていた、あの救い主のことにちがいない」。

「その救い主は、どこに生まれたって言ってた？」

「確か、布にくるまって飼い葉桶の中に寝ていると言ってたぞ」。

「えっ、飼い葉桶って、牛やヤギの餌を入れる桶だろう？　何で救い主がそんなところに寝かされているんだろうか」。

「そうだなあ、救い主っていったら、王様の家とか立派な家に生まれてもよさそうなのになあ」。

「うーん、でもさあ、もし救い主が王様のような立派な家に生まれていたら、俺たちは会いに行くことができなかったよなあ」。

「そうだなあ。飼い葉桶の中に寝ている乳飲み子が、俺たちに与えられたしるしだとしたら、俺たちはきっと、神様から特別に選ばれたんだよなあ」。

「そうだ。俺たちは、救い主のお誕生をお祝いするために、特別に選ばれたんだ」。

そういって羊飼いたちは飼い葉桶の中に寝かせてある乳飲み子を探しにいったのでした。

飼い葉桶の中に寝ている乳飲み子。みなさんだったら、どこへ探しに行くでしょうか？動物園でしょうか。それとも、牧場でしょうか。そんなところへ救い主を探しに行く人なんて、きっといないでしょう。でも、イエス様はそこにお生まれになったのです。私たちが探しに行かないような場所、まさかそんなところにと思うような場所に、イエス様はお生まれになったのです。誰も考えなかった場所。救い主どころか、普通の赤ちゃんでさえ、決して寝かされることのないような場所に、生まれたばかりのイエス様は寝かされました。なぜでしょうか？　その理由は、それが羊飼いに与えられたしるしだったからです。羊飼いが見つけることができ、羊飼いが訪ねていくことのできた場所。そこは、身分の高い人や気位の高い人たちにはかえって行くことのできなかった場所でした。その飼い葉桶こそが羊飼いたちに与えられたしるしでした。羊飼いたちは救い主のお誕生をお祝いするために特別に選ばれたのでした。彼らこそが、救い主のお誕生をお祝いすることのできる者たちとして、神様からの招きを受け、出かけていった人たちだったのです。

飼い葉桶の救い主。羊飼いたちは救い主と出会うまで、いったい何件の家畜小屋を訪ねたことでしょうか。家畜を飼っている家は、この地方にはたくさんあったことでしょう。その一軒一軒を、彼らは訪ね歩いたのです。しかも、彼らは何百頭という羊を引き連れて

いました。そんなたいへんな思いをしてまで探し回った救い主。そして羊飼いに与えられたしるしは、飼い葉桶に寝かされた乳飲み子というしるしだけでした。羊飼いたちは一生懸命、飼い葉桶の救い主を探して歩きました。必死になって探しまわりました。

救い主はどこにいるのか。救いはどこにあるのか。希望はどこにあるのか。必死になって、彼らはそれを探し求めたのです。しかし、それは私たちが思いもつかないような場所、人々が探しもしないようなところにあるのです。飼い葉桶の中の乳飲み子。それが羊飼いに与えられたしるしでした。このしるしには、いったいどんな意味があるのでしょうか。

阿南慈子さんというカトリックの信者さんがおられました。阿南慈子さんは幼児洗礼を受け、２７歳で結婚し、男の子と女の子のお母さんとして幸せに暮らしていました。けれども、３１歳で多発性硬化症という難病にかかり、車いすの生活となりました。３３歳で目が見えなくなり、そしてだんだんと首から下の感覚がすべて無くなっていきました。その後、人工呼吸器をつけながら生活を送りますが、２０００年１１月、４６歳という若さで亡くなられました。阿南慈子さんは亡くなるまで、口で話した言葉を書きとってもらうという口述筆記でボランティアの助けを借りて、詩やエッセイを執筆しました。その阿南慈子さんの本で「ありがとう、あなたへ」という本があります。その中に記されている阿南慈子さんの詩をご紹介いたします。

「ボーダーラインを越えた時」という詩です。ボーダーラインとは境界線のことです。境界線を越えることのむずかしさを詠った詩です。ひどい言葉も出てきますが、原文のまま読ませていただきます。

「ボーダーラインを越えた時」

生まれた子供は、五体満足でなければ絶望だ
他の人に　おしもの世話をかけるようにだけはなりたくない
寝たきりで　周りの人に迷惑をかけるばかりでは　生きていたくない
見たり食べたりする楽しみがない状態では　生きていてもむなしい
家族の顔さえ識別できないほどボケては　生きている値打ちがあるのか
古代から　恐れられ続けてきたハンセン病にだけはなりたくない
薬物依存症・アルコール中毒になるようでは悲惨だ
社会から　悪人だ罪人だと後ろ指差されるようでは最悪だ
ごみ箱から食べ物を探し出して生きる　乞食になっては最低だ
雨露をしのぐ場もない路上生活者まで落ちたくない
　　人はあちこちに　ボーダーラインをひきたがる
　　ボーダーラインを越えた時　何かが少し見えてくる
　　思い上がりうる美点を　みんな失った今
　　虚飾の全てをことごとく　剝ぎ取られてしまった今
　　ボーダーラインを越えた時　人は何かが少し分かるのかも知れない
　　人間が何であるのかということと　そして
　　神と　神の愛が何であるのかということを
なぜならキリストご自身が　ボーダーラインを越えたところに
低く低く底辺に　生まれ生き亡くなられたから……

阿南慈子さんはベッドで寝たきりの何もできない状態の中で、自分がボーダーラインの向こう側に置かれていることに気づきます。そしてそのことによって、ボーダーラインを越えて来てくださったイエス様を知るのです。救い主は、私たちが思いもよらないような場所、まさかこんなところにと思うような場所にお生まれになりました。イエス・キリストは、阿南慈子さんが元気だったころには彼女にも超えることができなかった境界線、ボーダーラインを超えてこられたのです。神様のもとから私たち人間のもとへとボーダーラインを超えてこられたイエス様は、私たち人間の世界においても、ボーダーラインを超え、低く低く底辺に生まれ、そこで生き、そして亡くなられました。そしてその象徴ともいうべき場所が、家畜小屋の飼い葉桶なのです。

今日の説教題は、「主の喜び給う人」とつけさせていただきました。野宿の番をしていた羊飼いたちの前に現れた天使たちは、「いと高きところには栄光、神にあれ。地には平和、御心に適う人にあれ」と言って神を賛美しました。これは、今私たちが使っております新共同訳聖書の言葉ですが、その前の口語訳聖書のそのまた前の文語訳聖書という文語体で書かれた昔の聖書があります。そこには次のように記されています。「いと高き處には栄光、神にあれ。地には平和、主の喜び給う人にあれ」。

「主の喜び給う人」とは、主なる神様が喜んでくださる人という意味です。今の聖書の言葉で言うと、それが「御心に適う人」ということになります。そしてその人たちというのは、今日の聖書の箇所に出てくる羊飼いたちのことです。貧しくて汚い仕事をしていた彼らは、安息日の礼拝に出ることもできませんでしたから、イスラエルでは罪人扱いされていました。そんな彼らでしたが、彼らの前に現れた天使たちの言葉、「あなたがたのために救い主がお生まれになった」という言葉を信じ、飼い葉桶に寝かされた救い主を見つけ出すことができました。このように、貧しくても、罪人扱いされていても、神様を信じ、その御言葉に従って歩みだす者だけが、飼い葉桶に寝かされた救い主に遭うことができたのです。そして、彼らこそが神様が喜んでくださる「主の喜び給う人」であり、「御心に適う人」なのです。天使たちは、このような人たちの上に、地には平和があるようにと賛美するのです。

２０２５年のクリスマスを迎えた私たちも、主の喜び給う人にならせていただくように、主の御言葉を信じつつ、それに従って歩んでいきたいと願います。

お祈りしましょう。